

はじめに

浅間山の北麓、群馬県と長野県の県境にある北軽井沢に「きたもっく」という会社があります。

100人足らずのスタッフと年商5億5千万円ほどの小さな会社です。

楽な経営ではありませんが、

過去25年間一度として対前年比の売上を下回ったことはありません。

石ころだらけの荒地に千数百本の樹木を植えて

多種多様な木々に囲まれた空間（フィールド）づくりを進めてきたことは、「自然と人の関わり」をカタチにする第一歩でした。

キャンプ場「スウィートグラス」は

今では9万人を超える宿泊者で賑わいます。

きびしい自然の中でしか生まれ得なかった

私たち「きたもっく」の企業理念に共感する20代30代の若者が全国各地から集まり、

60代70代の熟年層のスタッフも

第二の人生はここにありとばかりに楽しい職場づくりに汗を流し、

少しずつ大きくなってきました。

では、その「きたもっく」の企業理念とは？

自らを「地域未来創造事業体」と位置付けることで、何が作り出され、何を作り出そうとしているのか？

そのことを多くの人たちに知ってもらおうと、コンセプトブックを制作しました。

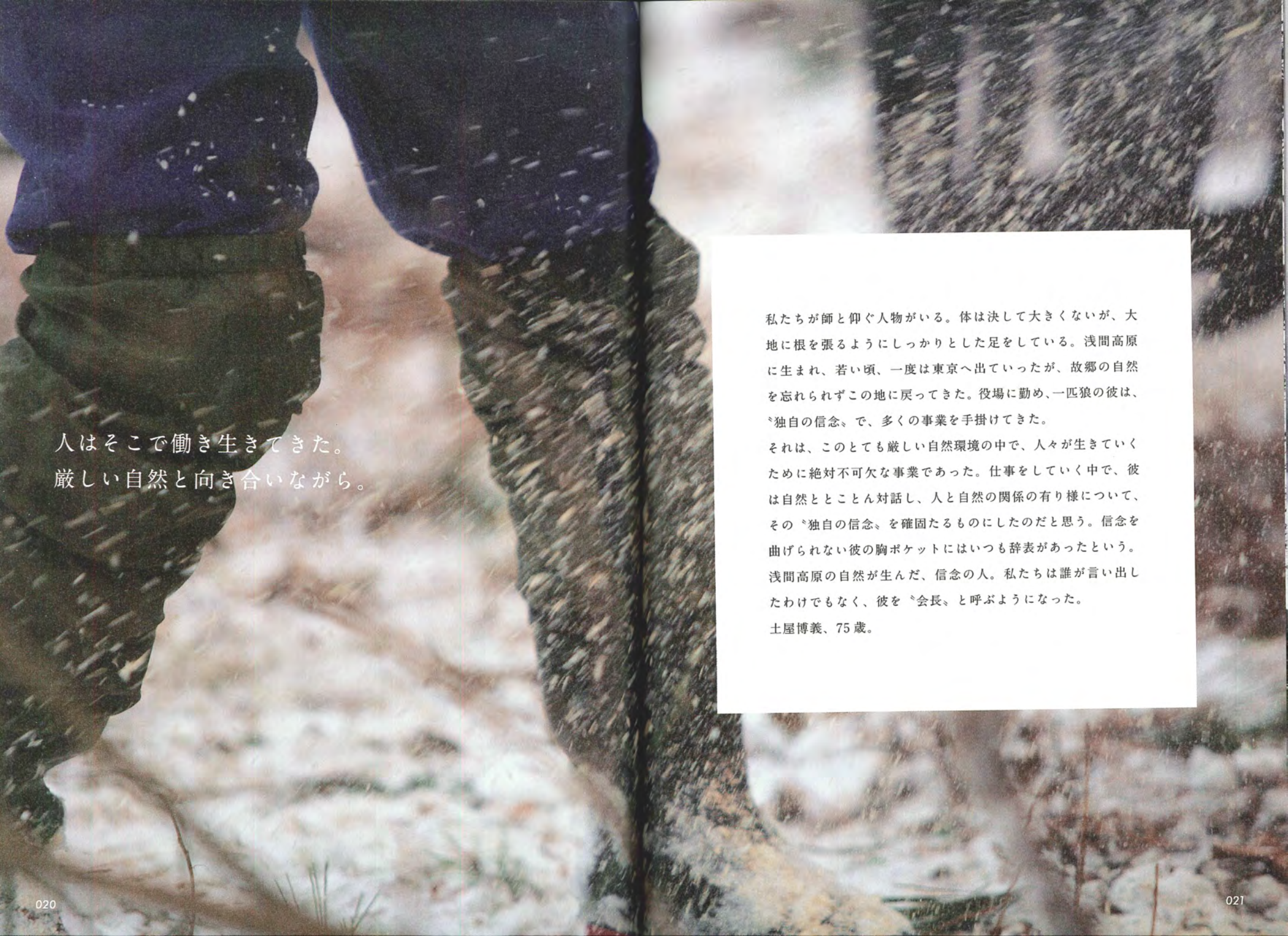
この本を手にとられた方々が、

辺鄙な地域であっても自然とのかかわり方によって新しい産業を生み出す可能性があることに気づいてもらえたらうれしいです。

2018年初夏

浅間高原北麓 北軽井沢

有限会社きたもっく 代表 福嶋 誠



人はそこで働き生きてきた。
厳しい自然と向き合いながら。

私たちが師と仰ぐ人物がいる。体は決して大きくないが、大地に根を張るようにしっかりとした足をしている。浅間高原に生まれ、若い頃、一度は東京へ出ていったが、故郷の自然を忘れられずこの地に戻ってきた。役場に勤め、一匹狼の彼は、
『独自の信念』で、多くの事業を手掛けてきた。

それは、このとても厳しい自然環境の中で、人々が生きていくために絶対不可欠な事業であった。仕事をしていく中で、彼は自然ととことん対話し、人と自然の関係の有り様について、その『独自の信念』を確固たるものにしたのだと思う。信念を曲げられない彼の胸ポケットにはいつも辞表があったという。浅間高原の自然が生んだ、信念の人。私たちは誰が言い出したわけでもなく、彼を『会長』と呼ぶようになった。

土屋博義、75歳。

彼は、自然がもつ無限の奥深さを感じとる
感性を持っている。



北軽井沢のような厳しい自然の中で暮らしていくためには、その自然を熟知していなくてはいけない。先人の教えはもちろん大切な教科書になる。しかし何より大切なのは感性ではないだろうか。森の木々と話し、風のささやきに耳を澄まし、足の裏全体で大地の声を聞く。そして、頬をかすめる雪に挨拶する。

一緒に森を歩いていて、こんなことがあった。

「あのカシワの木がこの森の主だ」。「立派なやつだ、もう何十年もこの森を治めているよ。あいつが元気なうちはこの森は安泰だな」。穏やかな笑みをうかべてそう言った。

つまり多分、彼は自然と友だちなのだ。親友と言っていい。ただ彼は相手が対等に付き合うには大きすぎることもよく知っている。



時に、頑固で厳格な教師であり、
やさしく微笑む母でもある。

2011年3月11日、日本人はその日のことを忘れないだろう。
その日を境に私たちはまた何かを学びそして変わった。そして今、
被災地の一角にどこから流れ着いたか、小さな木が赤い花を見事に
咲かせているという。また、三陸のとある入江には、すでに姿
を消して久しいしじみの稚貝が戻ってきたらしい。
たぶん、自然のやることには大きな意味があるのだろう。決して
サプライズはないような気がするのだ。

探し求めて

「自然」しか信じられなくなった、と言ったら言いすぎだろうか。北欧の人々は訪れた友人をまず森に誘うといいます。日本では森を歩きながら互いを確認する習慣が消えてしまいました。自然を構成する山、森林、川、水、土、石、空、風、葉っぱ、香り、色彩……手で触り、目で確かめ、舌で味わう、といった五感による確かな実感。人間不信の虚無思想に与するわけではありませんが、自然の中で育まれる人と自然、人と人の関係の方が圧倒的に安心できるのです。

ルオム (Luomu) というフィンランド語に出会ってから、かれこれ11～12年になります。当時、自然や環境を意識した生き方や生活スタイルを表す言葉として、スローライフとかロハスとか、オーガニックスタイルなどの言葉が雑誌の誌面に踊っていました。それはそれで自然（環境）と人の関係を表現する新しい潮流を感じさせましたが、浅間山麓に生きる者にとっては、どこかよそよそしい違和感がありました。田舎者からすれば、かなり“スカした”言葉に思えたのです。そんな時、私たちは2004年9月1日、上空数千mの

高さまで巨大な噴煙を立ち上げる浅間山のブルカノ式噴火に遭遇します。正直、環境にやさしい消費生活のあり方とか、都市住民のおしゃれスタイル的な自然にやさしく、自然と共生するといった通り一遍の認識なぞ一度に吹き飛んでしまいました。浅間山は時に予期せず「オイオイ、自然はそんなに甘いモンじゃないぞ」と教えるのです。実際2011年3月11日の東日本大震災はそれに追い打ちをかけるものでした。消費生活スタイルやアウトドアレジャーや自然共生のリラクゼーションといった考え方では通用しない自然と人のリアルな関係。私たちには、生きること、死ぬこと、地域で生活すること、働いて生計を立てること……について真正面で合理的で尚かつ人と自然の関係を的確に表現する言葉が必要でした。

Luomu は北欧フィンランドで自然農法とかオーガニック製品を意味する言葉として日常的に使われている言葉です。広義では、“自然に従う生き方”を意味しています。狭義と広義の意味合いは、どちらも人間と自然の密接な関係性を示しています。狭義 Luomu（自然農法やオーガニック製品）は、モノを生産する労働行為や消費生活の中での自然（環境）を意識した価値観を含み、その延長上には